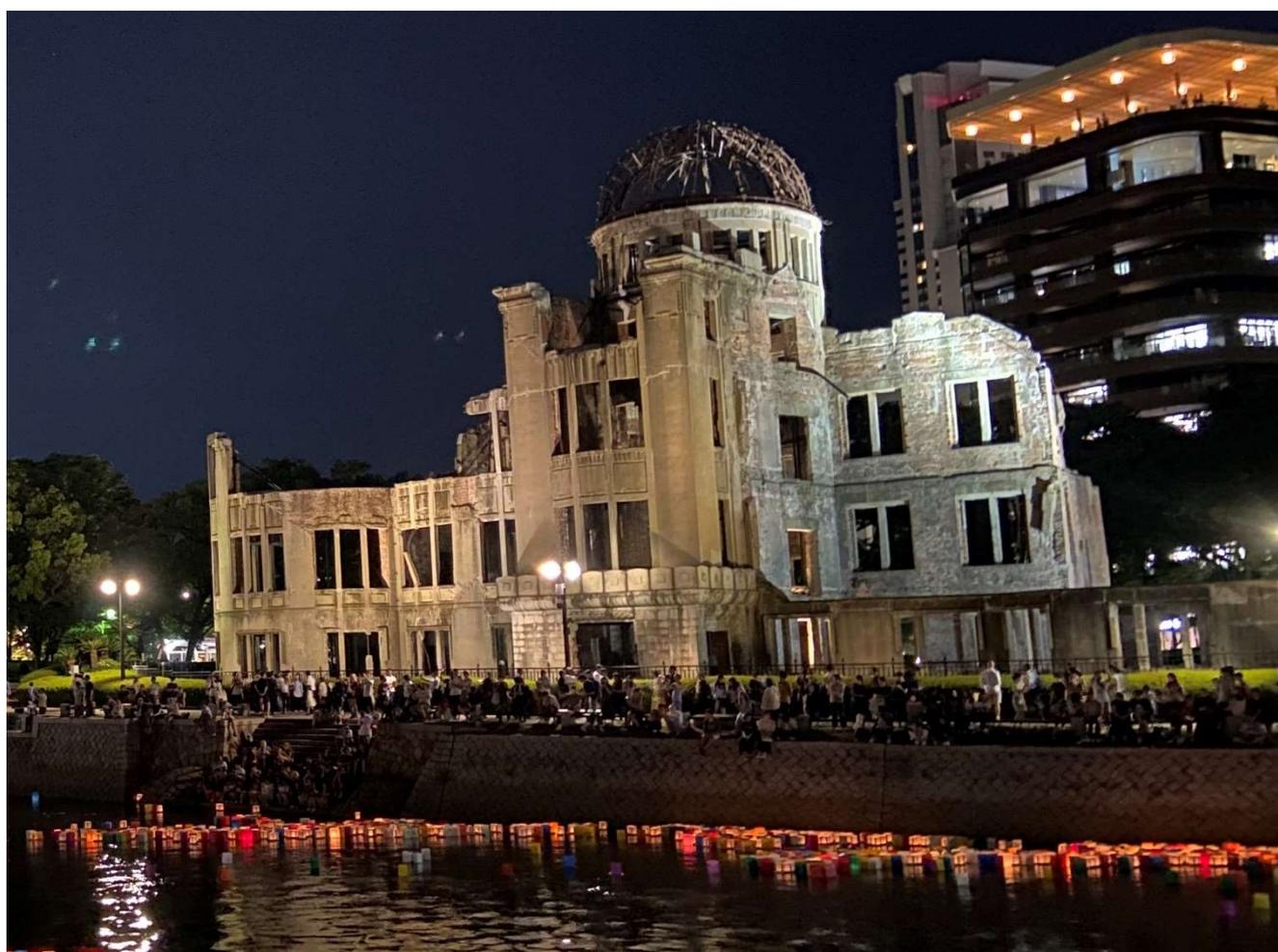


新潟市平和推進事業

令和6年度

広島平和記念式典等派遣事業感想文集



新潟市

発行にあたって

新潟市では、平成 17 年 10 月 10 日に「非核平和都市宣言」を行い、環日本海の友好・交流の拠点都市として、世界の恒久平和と核兵器の不拡散・廃絶を願い、さまざまな平和推進事業を実施しています。

この平和推進事業の一環として、毎年広島市で開催される広島平和記念式典等に市内中学生を派遣しており、現地でしか感じることのできない原爆の被害や戦争の悲惨さ、平和の尊さについて深く認識してもらい、その体験を語り継ぐ取組を行っています。

今年度は、公募による市内中学 2・3 年生 24 名と引率 2 名と添乗員 1 名の 27 名で「広島平和記念式典等派遣事業」を実施しました。

また、派遣事業に参加した中学生は、新潟市内の戦争被害がもっとも大きかった 8 月 10 日に毎年行っている平和祈念碑献花式にも参列し、戦争当時の新潟市が原爆投下の候補地であり、一時は街から人が避難していなくなったことや、強制連行されあるいは捕虜となった外国の方々も新潟の地で多く亡くなったことなどについても学習をしました。

この度、当事業に参加した中学生の感想を報告文集としてまとめました。

この文集を通して、より多くの人から戦争の悲惨さ、平和の尊さを再認識していただくとともに、戦争の事実が風化することなく後世に語り継がれることを願っています。

目 次

1 日程表・参加者名簿	1、2
2 参加中学生による感想文	
秋本 楽（臼井中学校）…	3
石田 紗喜（鳥屋野中学校）…	4
伊藤 菜々（寄居中学校）…	5、6
井上 心絆（味方中学校）…	7
大澤 虹太（葛塚中学校）…	8
加藤 橙穂（亀田中学校）…	9
川崎 美瑚（小針中学校）…	10
島田 育朋（白根第一中学校）	11
清水 優衣（新潟明訓中学校）	12
鈴木 堅士（曾野木中学校）…	13
高橋 悠（早通中学校）…	14
高山 羽奏（白根北中学校）…	15
田中 伶美（中野小屋中学校）…	16
土田 海都（内野中学校）…	17
椿 まい音（黒埼中学校）…	18
長井 莉愛（濁川中学校）…	19
楡井 優（附属新潟中学校）…	20
畑野 湊雅（両川中学校）…	21
本間 千晴（宮浦中学校）…	22
丸山 杏（新潟柳都中学校）…	23
丸山 恭佳（高志中等教育学校）	24
皆川 優衣（五十嵐中学校）…	25
村上 友葉（東新潟中学校）…	26
山本 玲音（関屋中学校）…	27
3 新潟市非核平和都市宣言	28

1 日程表・参加者名簿

参加者名簿

氏名	ふりがな	学校名	学年
秋本 楽	アキモト ラク	臼井中学校	3年
石田 紗喜	イシダ サキ	鳥屋野中学校	2年
伊藤 菜々	イトウ ナナ	寄居中学校	2年
井上 心絆	イノウエ ココナ	味方中学校	3年
大澤 虹太	オオサワ コウタ	葛塚中学校	3年
加藤 橙穂	カトウ ダイホ	亀田中学校	2年
川崎 美瑚	カワサキ ミコ	小針中学校	3年
島田 育朋	シマダ イクト	白根第一中学校	2年
清水 優衣	シミズ ユイ	新潟明訓中学校	3年
鈴木 堅士	スズキ ケンシ	曾野木中学校	3年
高橋 悠	タカハシ ユウ	早通中学校	2年
高山 羽奏	タカヤマ ワカ	白根北中学校	2年
田中 伶美	タナカ レミ	中野小屋中学校	3年
土田 海都	ツチダ カイト	内野中学校	3年
椿 まい音	ツバキ マイネ	黒崎中学校	3年
長井 莉愛	ナガイ リア	濁川中学校	2年
楡井 優	ニレイ ユウ	附属新潟中学校	2年
畑野 湊雅	ハタノ ソウガ	両川中学校	2年
本間 千晴	ホンマ チハル	宮浦中学校	3年
丸山 杏	マルヤマ アンズ	新潟柳都中学校	3年
丸山 恭佳	マルヤマ キョウカ	高志中等教育学校	3年
皆川 優衣	ミナガワ ユイ	五十嵐中学校	2年
村上 友葉	ムラカミ トモハ	東新潟中学校	2年
山本 玲音	ヤマモト レオン	関屋中学校	3年

2 参加中学生による感想文

79年前の広島

臼井中学校 秋本 楽

僕は、8月の5日～7日に広島へ研修に行きました。この研修では戦争の悲惨さ、平和のためには何ができるのか？ということ学びました。その中でも特に印象に残ったところが2つあります。

1つ目は、平和公園です。ここでは、アオギリの木と原爆ドームを見てきました。アオギリの木は約1.3キロメートルの場所で被爆しました。郵便局にあったこの木は遮るものがなかったため、爆風をまともに受けました。そのため、枯れ木はすべてなくなり、幹は爆心地側の半分が熱風で焼けてえぐられました。このように原子爆弾は人間だけでなく動植物や建物、人の心にも甚大な被害をもたらしました。そんな中、もう誰も生きてないだろうと思っていたこの木は翌年の春になって芽吹きました。この木が一生懸命生きている姿を見て、絶望に陥っている被爆者の心に勇気を与えました。この原子爆弾投下は非人道的なことであり2度と落としてはいけないと強く感じました。続いて、原爆ドームです。原爆の被害を受けた象徴的な建物といえば原爆ドームではないでしょうか？当初原爆ドームは、人々から「あれを見ると被爆した時の怖さがよみがえってくる」「広島にドームを維持するお金はない」などの理由で崩されそうになっていました。しかし、当時の懸命な小中学生の署名活動によりドームは残される形になりました。僕は、当時の方が家族、友人などの大切な人を突如として奪われたと考えると胸が締め付けられるような気持ちになりました。僕はこのドームから、原爆の破壊力は恐ろしく戦争は2度と起こしてはいけない。と訴えられているような気がしました。

2つ目は、被爆者の方の講話です。講和してくださった方は土居さんという方でした。土居さんの被爆体験はこのようなものでした。「8時15分、ものすごい閃光と共にとてつもない地響きが鳴り響いた。そして地上から爆発した原子爆弾はまるで小さな太陽だった。避難している最中はまさに地獄のようだった。避難している道中は肌がただれ幽霊のようにになっている人々が「助けて、苦しいよ、水をくれ」と言っていた。橋の下では死体が川で折り重なっていた。そして、今では自分だけが生きている罪悪感、家族、友人、大切な人を失った耐え難い悲しみだけが残っている。」とおっしゃっていました。また、土居さんは僕たちが平和に貢献するために必要なことは、相手を思いやること、挨拶を行うことだとおっしゃっていました。挨拶は、誰にでも出来、すぐに仲良くなれる方法だからです。原爆は死人を出すだけではなく大切な人を失う悲しみやその後の後遺症も生み出すことから、二度と使ってはいけない兵器だと思いました。そして、今ある平和がどれだけ幸せな事なのかと気が付きました。

僕はこの研修を通して、戦争は残虐でたくさんの悲しみを生み出す非人道的な行為だから絶対にやっではないし、一人一人が平和のために相手を思いやる行動をする事がとても大切だと思いました。また、平和のためには、戦争が残虐な行為だという事、それぞれの違いを受け入れる事の大切さを理解することが必要だと学びました。

僕は、今回広島で学んだことを少しでも多くの方に伝えていきたいです。また、平和のために出来ることを僕なりに実践していきたいと思います。

原爆の悲しみと平和への希望

鳥屋野中学校 石田 紗喜

私が、今回の広島平和式典派遣事業に参加して特に印象に残っていることは二つあります。

一つ目は、原爆による被害、被害者方の悲しみの深さです。広島平和記念資料館では、酷い火傷や怪我を負い手当を待つたくさんの人たち、原爆が落とされた日には元気だったが、後遺症に悩まされて寝たきりになってしまった人たちの写真や資料の展示がありました。被爆した人たちが実際に着ていた服や遺品、怪我や火傷を負った人たちの写真を見ると今にも「痛い」「苦しい」「助けて」などの声が聞こえてくるような気がして、自分がそこにいたらと考えると恐怖を感じました。また、原爆被害者証言のつどいでは、実際に原爆の被害に遭われた方のお話を聞くことができました。原爆が落とされた後のヒロシマは、街のいろいろな場所で人が亡くなっている酷い状況で、生き抜くだけで精一杯だった。自分の母も、家に帰る途中道で倒れている人に「助けて」と引き留められたけれど「何も持っていないから」と見殺しにするしかできなかった。と当時のことをお話しされていたときの口調から、被害者の方の苦しみや悲しみが痛いほど伝わってきました。そして、「多くの人が原爆の被害を忘れてしまったら、また同じ過ちが繰り返されるかもしれない。だから、まだ知らない人や身近な人に伝えてほしい」ということを何度も繰り返しお話しされていたことが強く印象に残っています。今回、広島に足を運び、原爆に関する施設を見学し、被害者の方のお話を聞くことによって、自分の中に歴史の授業で知識としてしかなかった原爆による影響や被害のことが、痛みや悲しみをともなう、より身近な出来事として感じられました。

二つ目は、世界中の人々の平和に対する思いです。平和記念式典には外国の方も大勢参加していました。道を歩くと常に様々な国の言葉が聞こえてきました。また、原爆に関する施設を見学した時には、同じ場所に居合わせたたくさんの外国の方が熱心に資料に目を通し、展示品を見ている場面に会いました。今世界では一般家庭でも銃を所持できる国、現在進行形で戦争を行なっている国、核兵器を作り続けている国があります。争いがない平和な世界とは言い難い状況の中、広島で起こった出来事に関心を持って来る。さらには、平和への想いや亡くなった方への慰霊を込め、とうろう流しに参加している世界中の人の姿がありました。これほど多くの人々の平和への祈りを受けて、私は戦争や原爆がない世界の実現への希望の光を感じました。今回の体験から、私は一人でも多くの人に戦争や原爆の現実を伝えていきたいと考えるようになりました。被害者の方が悲しい記憶を思い出しながらも未来の人たちのために語ってくれたことは、原爆を体験していない私たちにとって、自分ごととして受け止めるための大切な重要な証言です。

もし、自分や大切な人に同じようなことが起こってしまったら…と想像したときに、悲しみを感ぜない人はいないと思います。そう考える人が一人でも多くなっていき、周りの人を大切にしようと思う人が増えていけば平和な世界に近づいていくと私は信じています。

「平和のバトンを繋いで」

寄居中学校 伊藤 菜々

100歳で亡くなった私の曾祖父は戦争体験者です。多くの戦友を亡くし、生前「戦争は何も残らない」「戦争だけは絶対にしてはいけない」と話していました。私は曾祖父が大好きで、亡くなる直前、曾祖父の近くで眠ったことがありました。ある日の夜中、戦争の記憶を思い出し、うなされる姿を見て、曾祖父の心の中に戦争の爪痕が残りに残っていることに衝撃を覚えました。戦後70年以上も経っているのに曾祖父を苦しめる戦争の記憶、戦争の恐ろしさを目の当たりにした気がしました。どんなに恐ろしく辛い体験をしてきたのだろう、、、それ以来私は戦争についてもっと知らなければならぬのではないかという想いが強くなり、今回の広島派遣事業の参加を決意しました。

今回の広島派遣事業では、爆心地近くにある平和記念公園や平和記念資料館の見学、平和記念式典の参列などを通じて、世界で初めて原爆が落とされた広島の様状や、世界の恒久平和への思いを学びました。中でも特に印象深かったのが、「原爆被害者証言のつどい」でお聞きした、お母様が被曝されたという寺田美津枝さんのお話です。寺田美津枝さんのお母様、福地トメ子さんは、1945年8月6日に広島で被曝し、一瞬で両眼の視力を失いました。8時15分、「ピカッ」と光った瞬間、目にはガラスが立ち、顔、頭、身体にはゴマをまいたような爆風の傷ができ、全身血だらけの状態になったそうです。トメ子さんは岡山の眼科に入院し、「左目は駄目だが、右目は治療すれば少しは見えるようになるかもしれない。」と言われ希望を持ちましたが、食料事情が厳しく、経済的状況から退院せざるを得ませんでした。広島に帰る際、トメ子さんのお母様から「わしと一緒に汽車から飛び降りて死ななか。」「今まではわしがついておってきたが、わしの手を離れると、これからどうしてやれるだろうか。それに、間もなく生まれてくる乳飲み子を育てることもできないだろうし、お前一人で死ぬというのではない。わしも一緒に死んでやるのだから。」と言われ、自分も同じ思いを持っていたトメ子さんはハッとしながらも、「子供のためにどうしても生きてやります。」と言ったそうです。家に帰り、子どもたちの温もりを感じて、「生きて帰って良かった。」と思ったトメ子さんは、どんなことがあっても生きようと決心をし、一生懸命勉強してマッサージの国家資格を取得、5人の子育てに全力を尽くしました。

私は、このお話をお聞きして、原爆は、「ピカッ」と光ったその瞬間に街を破壊し、多くの命を奪っただけでなく、命が助かったとしても、身体や心に大きな傷をつけ、苦しみを与え続ける恐ろしい兵器だと思いました。トメ子さんがお腹に新しい命を宿していて、家で待っている子供がいることを知っていても、「死の選択」を提案せざるを得なかったトメ子さんのお母さんの気持ちを考えると、胸が締め付けられる思いがしました。私が歩いたあの広島で、79年前、こんなにも苦しく切ない思いをした家族がたくさんいらっしやっただけを決して忘れてはいけないと強く思いました。トメ子さんは、「一度に多くの生命を奪う核兵器は直ちに廃絶してください。とにかく戦争という字も言葉もこの世から無くしてください。もし再び戦争をするのであるなら、私の目が少しでも見えるようにしてから、私の子供の顔が一目見られるようにしてからにしてください。」と祈るようにつぶやいたそうです。

私達がこのお話を寺田美津枝さんからお聞きできたのは、母のトメ子さんが精一杯生きて命を繋いでくれたからです。トメ子さんから『命のバトン』を受け取った寺田さん。そして寺田さんからお話をお聞きできた私達は、『平和のバトン』を受け取りました。私はそのバトンを多くの人に繋げていくことを誓います。そのために私は、広島で自分の目で確かめたこと、自分の耳と心で聴いたことを周りの人に伝えていきます。そして平和のバトンを繋いでくれる仲間を増やし、核兵器廃絶の声を、平和のバトンの力を、大きくしていきたいと思います。

「トメ子さん、ひいおじいちゃん、皆さんが教えてくれた平和の大切さ、私達が伝え続けていきます！」

私は、平和の尊さと原爆の恐ろしさについて、広島派遣研修の3日間で多くのことを学びました。参加して分かったことは、広島に行くまで原爆の実相を私は知らなかったという事です。小学生の時広島に原爆が落とされたことを知り、中学生でそれをさらに深く学び、それはただ悲惨な状況であったという認識でした。ですがこの研修で被爆された方がどれだけ悲しかったかどれだけ辛かったかを今になってやっと分かってきた気がしました。

1日目、平和記念公園を見学し、その後に被爆者体験講話を聞きました。お話をしてくださった方は、当時3歳で家族も亡くなり、原爆孤児になったそうです。時折、その時のことを思い出して辛そうな表情を浮かべながらこれまでの葛藤や被爆者の思いをお話ししてくれました。原爆が落とされる前、小学校では朝会をしていたり、皆さんごく普通の生活を送っていました。でも原爆が投下された瞬間、町が一瞬にして変わり果て爆心地の熱線は3000から4000℃、爆風の衝撃波は30トンという想像もできないほどの状況になりました。人は蒸発的即死に近く、遺体は焼き尽くされ骨も見当たらない状況で、これを被爆者の方は原爆の実相と言いました。このことを聞いて初めて知りました。私がこれまでに学んだ原爆の事はほんのごく一部であり、被爆者の方にしか分からない実相があるんだということ。

2日目には平和記念式典に参列し、その後原爆被害者証言のつどいに参加しました。1日目とは違う被爆者の方にお話をお聞きしました。その方はとても綺麗で一見、元気な方だなという印象を受けました。でもこの方も実際には原爆の被害を目の当たりにし、ご自身も何度も病気になっているという事実をお聞きしました。この方は当時の景色が脳裏に焼きついているから式典にも記念館にも入った事がないと言いました。この一言でどれだけ今も辛い思いをしているのかが分かりました。死体を踏んだ時の感覚や黒いような赤いような炎、今まで経験した事のない匂いなど苦痛な経験を私はやっと知る事ができました。戦争の悲惨な状況を知り、なんとも言えない気持ちになっていた私に被爆者の方の多くの言葉が心に残りました。1番心に刺さったのは、「生きてさえいればどうにかなる。命さえあれば何とかなる。明るく、楽しく、前向きに。」という言葉です。戦争の時代を生きていた方に、その時を生きていない私が勇気づけられているのは不思議な気持ちでした。しかし、この言葉が被爆者の方の人生と共に歩んできた言葉だと思うと辛い事があっても頑張らなきゃという思い、そしてもっと未来の平和を願う気持ちが強くなりました。

最後に、平和のために自分が今できることを考えました。それは、平和を願う気持ちを周りに広め、手を取り合い助け合うことです。貴重な研修に参加した事を生かすよう、この研修で学んだ事を周りに広め、平和に対する思いが強くなるように努力したいです。そして、これからも平和が続く未来を強く願います。

「本当の平和」へ向けて

葛塚中学校 大澤 虹太

「核兵器は人間が作ったものであり、人間の良心でしか消せない。そして、核と人間は共存絶対にできない」これは直接被爆者の方が講話の時におっしゃっていたお言葉です。今でもこの言葉が自分の心に強く残っています。79年前の8月6日朝8時15分17秒、広島上空に原子爆弾が投下されました。その原子爆弾は上空約600mで炸裂し熱線、爆風によって一瞬にして広島市内が破壊され、罪のない人々が亡くなりました。そして原子爆弾投下から79年後、自分は「平和」と「原爆の実相」を学ぶため、研修として広島へと向かいました。研修中、今は数少ない直接被爆者のお2人から貴重なお話を聞ける会がありました。講話をしてくれた被爆者の男性の1人は3歳に被爆、もう1人の女性の方は9歳の頃玄関で被爆されたと言います。どちらの方も被爆した当時のことを、「本当の地獄だった」と、語っていました。3歳のころに被爆をされた男性は、この講話で被爆の瞬間を語ってくれました。被爆の瞬間「ピカッ」という閃光の後、爆風で畳と一緒に高く吹き上げられたそうです。その影響で家は破壊され、家族全員が生き埋めになってしまいました。男性はそのとき「お母ちゃん、タスケテー」と叫ぼうとしたが声が出なかったと言います。その後助けられました。その場面が毎日「夢」の中に出て気が狂う恐怖が続き、生きる気力を失いそうになったそうです。また、9歳に被爆をされた女性は、家の玄関で被爆したため熱風、熱線をあまり浴びなかったため、酷い火傷を負ったものの無事助かりました。その後、山に避難をしますが避難する際の道が狭かったと語っていました。単に狭かったのではなくそれは、服が溶けほぼ全裸状態の人間の死体の山で道が狭まっていたと言います。しかし、そんなのは一部で、大体の死体は既に焼けていて、骨や粉灰となっていたそうです。さらに街は原爆の影響で破壊され、住む場所もないため、野宿をする日々が続きました。そんな苦しい苦しい日々の中、苦しいことばかりではなく、「笑顔」になれることもあったようです。女性は歌やダンスが好きだったため、そのようなことをしてる間は辛いことも忘れられたようです。また、被爆者証言者のお2人は被爆した時はどんなに苦しくても「自殺はしない。絶対に前向きに生きる。命さえあればどうにかなるんだから。」と仰っていました。自分はこの言葉に心を揺さぶられ、被爆をしたらもちろん苦しい、辛いこともあるけれど、そんな中でも笑顔に前向きに生きていく、命を大切に。という被爆の実相を新たな視点で捉えることができました。広島では、他にも広島平和記念式典の参列や平和記念資料館の見学などここでは語れない沢山の「本当の平和」について学習することができました。今年で広島原爆投下の日から79年が経ち、年々被爆者の方も高齢化が進み原爆について語れる人々が少なくなってきました。こんな時こそ、ヒロシマ、ナガサキの出来事を風化させない為に自分たちのような若者が行動するときなのではないでしょうか。被爆者の方も「祈るだけでは平和は来ない。若い世代の人々が原爆の実相、平和について知って欲しい。そして、今日聞いたことを1つでもいいから他の人に話してほしい」と仰っていました。まずは、周りの人と平和について話し合うことからでもいいのではないのでしょうか。今こそ若い世代の一人一人が平和へ向けて取り組むべきじゃないのでしょうか。簡単なこと、少しずつでも構いません。きっと将来、「本当の平和」へと繋がっていくはずですよ。

ヒロシマの平和への想い

亀田中学校 加藤 橙穂

令和6年8月5日から7日まで新潟市平和推進事業で広島平和式典に参加するため広島市に行ってきました。3日間広島について、勉強した中で私の心に残ったことが4つあります。

1つ目は原爆ドームです。原爆ドームの元々の名前は、「広島県物産陳列館」という名称でした。物産陳列館の目的は、広島県の物産の販売を図る拠点でした。その後の名称は「広島県立商品陳列所」、「広島県物産奨励館」と改称されました。原子爆弾が投下された後、建物は7割なくなり、ガラスの窓がなくなっただけでも建物は残っています。

2つ目は原爆被害者証言のつどいです。被爆者証言のつどいでは当時の状況を語ってくれました。語ってくれたことは、何歳に原爆の被害を受けたのか、自分はどこにいても何をしていたのか、原爆が落ちてみんなはどんな行動をしていたのかなどを話してくれました。被爆者証言のつどいの講和者土居さんは自分の平和について、強く語ってくれました。

3つ目は平和記念資料館です。平和記念資料館には、爆風の写真、黒い雨の絵、原爆で被害を受けた人の写真があり、展示された物には、弁当箱、3人の中学生の遺品や三輪車などがありました。さらに「魂の叫び」というコーナーには亡くなった人の写真、当時のメッセージ、その人が大切に使っていた物が展示されていました。

4つ目は平和の灯で、平和の灯には火がついています。この灯は点火されて以降途絶えたことがなく、「核兵器が地上からなくなる日まで燃やし続けよう」という核兵器廃絶の悲願の象徴となりました。平和の灯の火は、昭和39年（1934年）8月1日に点火されました。火が消えるには、核兵器が世界中から消えれば、平和の灯の火が消えます。

そして、この広島での2日間で、学んだことから私は平和への想いがわかりました。想いは2つあり、1つ目は世界中にある核兵器が消えてほしいことです。理由は核兵器のせいで、大切な人や物がなくなるからです。2つ目は人間が戦争を始めないことです。理由は一度戦争を始めたら、始めたほうが、「終わり」と言っても相手が反撃を続けてどんどん戦争が大きくなってしまうからです。この2つが平和への想いです。

最後に、自分が平和のために今できる事ですが、私が広島で見てきた物、聞いてきた物を家族や学校の仲間に、言葉や写真でつたえることです。特につたえたいことは、原爆被害者の土居さんの言葉「人の手で作った物は必ず人の手で壊さないとだめ」です。この言葉が戦争の無い世界を作っていくことだと思えます。

研修での学び

小針中学校 川崎 美瑚

「平和」とは何か、どうすれば「平和」な世界になるのか深く考えたことはありますか？それとも、戦争や平和の話は遠い世界でのこと、他人事だと思っていますか？私は広島に行き、平和について自分事として深く考えることができました。

原爆被害者証言のつどいで、土居光子さんという方は話されていました。土居さんは、お母さんと一緒に広島市の電車の中で被爆されたそうです。お母さんは光子さんを連れて逃げる途中、たくさんの親切な人に助けられましたが、重症を負って倒れている人に着物の裾を捕まれ「助けてください、水をください」と言われた時には何もできずにその場を離れました。そのことをずっと後悔し、他の人に親切にされたのに自分は誰も助けられなかったという罪悪感を抱えていた聞きました。土居さんは、つどいが始まる前は生き生きとした優しいような表情をされていたのですが、話が始めると、とても辛く苦しそうな声や表情で話されました。その様子から、当時を振り返り思い浮かべることの苦痛が伝わり、私も胸が痛くなりました。土居さんのお母さんは無事に逃げた後にも被爆した家族を次々に失い、差別や後遺症などに苦しんだそうです。生き残ったとしても生涯苦しい気持ちを背負っていかねばならなくなる、戦争の悲惨さを感じました。土居さんは、まずは周りの人に優しい行動や言葉掛けをすることが大切なのだと話されました。とても強い信念を持った目で語りかけてくださったので、心に響きました。私も土居さんの体験や思いを聞き、周りに気を配って誰にでも優しさを持って接するようにしたいと思いました。

この研修で、私は平和のために、過去の出来事を知って考えることが大切だと思いました。辛い話からは目を背けたくなってしまふけれど、たくさんの人が戦争について知り、考え、行動することで平和が守られるのではないのでしょうか。8月6日の広島は、そのように人々が平和について思いを巡らせるための場にもなっていました。広島空気を感じて、日本人として、地球に生きる人間として、犠牲者を追悼し、平和について考えることは他人事ではないのだなと強く感じました。

資料館に展示された痛々しい遺品の数々、重症を負った被爆者の写真、願いを込めて折られた鶴など、私には見たものの全てが「もう二度とこのような悲劇を起こさないで」と訴えているように思えて、忘れられません。今、この世界には、1万2120発の核兵器があります。若い世代が平和について学び、お互いに手を取り合わなくては、それらがもう一度使われるような事態に陥るかもしれません。私は、被爆者の方から聞いたこと、資料館の写真で見たことを絶対に現実で見たくありません。そのために広島で学んだことを周囲の人に伝え、世界のニュースを積極的に知り、平和について考え続けていきたいです。

この夏は私にとって今まで生きてきた中で一番忘れられない経験をした夏でした。私は国語の授業で「大人になれなかった弟たちに」という物語を読んで戦争について興味を持ち、いつか平和について本気で学んでみたい、詳しく調べてみたいと思っていました。今回新潟市から広島平和派遣研修の機会を頂き、八月五日から七日の三日間、広島に行き平和について学ぶことができました。私がこの広島平和派遣研修の中で一番印象に残ったのは、実際に原爆で被害を受けた方からお話を伺ったことです。お二人の方からお話を頂き、一人目の方は三歳で爆心地から五百メートル、二人目の方は九歳の時に爆心地から千六百メートルの場所で原爆の被害を受けました。お話を伺った二人共、原爆により家族を失い、七十九年経った今も後遺症や過去のトラウマに悩まされていましたが、それを乗り越え戦争を知らない若い世代に辛い経験を必死に語り継いでいく力強さに感動しました。私はこの講話を受け、今もなお後遺症に苦しめられている方々がいるのに今まで自分はそれを知らずに当たり前のように生きてきたのかと思うと、自分は何だか恵まれていたのだろう、と胸が締め付けられました。一日目は平和記念公園を見学しました。公園は爆心地から四百六十メートル離れた場所にあり、被爆した樹木アオギリや噴水、原爆の子の像など、原爆の被害を後世に伝えるための施設がたくさんありました。特に原爆ドームは当時の建物がそのまま瓦礫と共に残されており、看板に書いてあった原爆が投下される前と後の建物の差に驚きました。広島に降り立ってまだ一日目でしたが、実際に原爆で被害を受けた方々や建造物を目の当たりにし、とても悲しい気持ちになりました。二日目は広島に原爆が投下された八月六日、広島平和記念式典に参加しました。この広島派遣研修に参加するまでは八月六日は私にとって夏休みの何気ない一日でしたが、一日目に原爆がどれだけ悲惨なものかということを知ることができ、八月六日は絶対に忘れてはいけない日だと身をもって実感することができました。夕方になり、原爆で亡くなった方に追悼の意を込めて灯籠を川に流す灯籠流しに参加しました。私はなぜ空に向けてではなく川に流すのか疑問でしたが、これは被爆した方々が水を求めて川に流されながら亡くなったためだと分かりました。この灯籠流しを通じて改めて原爆がもたらす悪影響の悲惨さを知ることができました。最終日の三日目は平和記念資料館を見学しました。資料館では実際に被爆した方の写真や遺品が生々しく展示されていました。私はこれが現実なのだろうかと思え入れられず、目を逸らしてしまいそうになりましたが、また同じ過ちを繰り返さないためにも、今ある現実を目に向け、当たり前にある平和に感謝して守り続けていきたいと思いました。私は初めて広島に降り立った時、とても賑やかで緑の多い街だと感じました。私は最初広島を昔、原爆が投下された場所、というイメージしかありませんでしたが、とても親切な方々が多く、私は一日目で広島が好きになりました。他にも高層ビルや路面電車、緑豊かな公園など七十九年前に原爆が投下されたとは思えないほど綺麗で自然溢れる街でした。このように復興できたのも、日本が戦争を放棄し、国際交流を盛んに行ったおかげだと思います。原爆は多くの罪のない人々が犠牲になりましたが実際に核兵器が投下された日本は戦争を絶対にはいけないということを世界に証明してきていると思います。

原爆の悲惨さ

新潟明訓中学校 清水 優衣

わたしは今回、広島に初めて訪れました。広島に行く前は教科書で見たことがあり、大変だったんだとくらいの軽い気持ちにしか思っていないでして。ですが、この三日間を通して戦争はしてはいけないこと、平和な日々がどれだけありがたいかということがわかりました。この三日間で特に印象に残ったことは3つあります。1つ目は平和記念資料館です。ここでは人々が当時被爆した時に着ていたボロボロになった服、生きても原爆によって病気にかかり亡くなってしまった人、まだ5歳とかなのに原爆という兵器で未来が亡くなってしまった人、たくさんの人々の悲しい遺品などが飾られていました。そして最初には一面に被爆後の広島の写真がありました。原爆ドームはありますが、その周りのものは全てなくなってしまっていて原爆の恐ろしさを知りました。当時の写真や、当時を再現した絵などは全て悲惨なものでした。それを見てわたしは、原爆は使ってはいけない、作ってはいけないものだと感じました。平和な日々は一瞬にして崩れてしまうということがわかりました。2つ目は平和記念式典です。今までテレビで見えていましたが、目の前で見ると79年前にここに原爆が落とされたんだと思うと、とても胸が苦しくなりました。総理大臣など、いろいろな方が世界中から来ていました。話の中には、今起こっているウクライナとロシアの戦争など世界中で行われている戦争について話されていました。このままだと核兵器をいつ使われるかわからない状態なので、戦争が一刻も早くなくなってほしいなど改めて思いました。3つ目は被爆体験者の話です。寺田さんというかたから話を聞いた時、とても悲しい気持ちになりました。寺田さんはお母さんのお腹の中にいる時被爆されました。寺田さんのお母さんは広島駅という被爆地から近い位置で被爆されたと言いました。原爆の影響で両目にガラスが刺さり、目が見えなくなったと言います。なのでミルクをあげたりご飯を食べさせることが難しかったと言いました。そして寺田さんの結婚式ではウェディングドレスが見られず、見せてあげたかったとおっしゃっていました。85歳まで生きたと言っていました。それを聞いて、原爆の被害はあってそれでも諦めずに、子育てして生きていくのはとてもすごいと思いました。広島に行って、戦争は何もしてない人の将来、命を奪ってしまう。戦争はしてはいけない。核兵器は被害が大きい。平和な日々がどれだけ大切であるか。ということ学びました。その中で一番大切なのは原爆について知って広めていくことだと思います。今回の研修で学んだことを大切にしていきたいです。

二度とあの過ちを繰り返さないために

曾野木中学校 鈴木 堅士

私はこの活動をとおして、改めて戦争の悲惨さと平和への尊さを知りました。当時の広島に起こった悲惨なできごとをたくさん見て、聞いたことにより平和の良さをさらに学びました。その中で特に心に刻まれたことを三つ紹介します。一つ目は被爆体験講話での飯田國彦さんによる話です。飯田さんは三歳のときに爆心地から八百八十メートル離れたところにある母の実家で被爆しました。家の中にいたところ、突然、ピカッと閃光がなった後、爆風で畳と一緒に吹き上げられ、生き埋め状態になり、誰も助けることができませんでした。その後、祖父によって掘り起こされましたが、髪は抜け、体に変色し、母と姉は壊死して亡くなったそうですが飯田さんは生き残ったそうです。しかし、原爆の後遺症で病弱になり授業もまともに受けることができず、中学生になってからの楽しみであった部活にも入れてもらえず、補習をさせられたそうです。放射線の影響により、体の染色体の二十三%に異常がありましたが、必死に頑張っただけでクラスで一番になり、社会人になっても店長や所長にもなったそうです。飯田さんは、店長になった後も朝一番に出社し、出会いを大切にしていました。苦しくて死にたいときもありましたが、自殺だけはしなかったそうです。その理由は「断末魔の叫びで地獄に墮ちるのはごめんだ」と言っていたそうです。この体験談を聞き、苦しくても前向きに行動すれば、かならず恩がくるということを学びました。私もこの講話を忘れず常にものごとを前向きに捉え、出会いを大切に、何事にも全力で取り組みたいと思いました。二つ目は、平和記念公園です。公園内では様々な平和に関するモニュメントがありました。核兵器が世界からなくなることを祈る平和の灯、原爆で亡くなった人をなぐさめる死没者慰霊碑そして、原爆の子の像です。みなさん、佐々木禎子さんはご存じでしょうか。禎子さんは二歳の時に被爆し、十二歳の時に白血病でなくなりました。貞子さんは、入院中に、「折鶴を千羽折れば願いが叶う」と聞いて、病気が治ることを祈って、薬の包み紙などで折りましたが、願いはかないませんでした。原爆の子の像は禎子さんが亡くなったあと同級生が記念碑を建てたいと考え建てました。その後、原爆で亡くなったすべての子どもの霊を慰めるために像が建てられました。今では原爆の子の像に平和を願って世界中から毎年多くの鶴が捧げられています。三つ目は平和記念公園内にある平和記念資料館です。平和記念資料館では原爆が落ちた当時の状況や原爆の悲惨さ、そして平和を目指すことについてものがありました。中に入ると、当時の悲惨さを伝える写真や絵や被爆者の所持品などが展示してありました。その中でも原爆の影響で皮膚がはがれ落ちる絵や熱線や放射線で中身が炭になった弁当箱に目を持っていかれました。原爆はこのようにしてしまうことに対してますます理解が深まりました。原爆は非常に恐ろしいものであり人々の暮らしや一瞬にして奪ってしまいます。今では広島原爆の何百倍の威力をもつ核兵器が使われています。このようなことを起こさないように願っていますが、みんなが願わない限りなくなることはありません。私はこのような活動を通してのことをいろんな人に伝え、戦争などの惨劇をなくしたいです。

恐ろしい兵器「79年前の悲劇」

早通中学校 高橋 悠

私はこの研修でとても印象的だった場所は原爆死没者追悼平和祈念館と平和記念資料です。何故、ここなのかと言うと、そこの展示で、原爆で亡くなった人たちの写真の中で、その中の写真でまだ子供の人の遺影があるところや原爆によって被爆した人の火傷や放射能を受けた人の写真を見て原爆は、大人であろうが子供であろうと一瞬で多くの命を奪ってしまう恐ろしい兵器である事がよくわかりました。しかもこのことは全て今から79年前にあった事で当時の事を未だ細かく語る人がいて、今でも忘れないほどの恐ろしい出来事ということがよくわかりました。語り手によると当時、アメリカへ対して強い怒りを覚えていたと語っていました。

今後私たちはこの原爆とどのように向き合っていくかです。私は核兵器を少しずつ無くしていくのが最適だと個人的に思っております。何故ならいきなり無くすのは計画的にとっても困難だと思われ、あまり信頼が出来ないといわれ、あまり支持されない可能性がかなり高いからです。2つ目は現在の侵攻問題や紛争など社会問題の解決を進める事もかなり重要だと私個人的には考えています。

現状、この世界にたくさんの侵攻、領土問題、紛争、偏見などの色々でかなり難しい国際問題、社会問題がたくさんあって、もう世界各国がバラバラで、今現在、今、核などの関連条約などをだしてもなかなか上手くいかないと個人的に考察しております。まあここで何が言いたかったかという理想をみるのはけっして悪いことでは無いがそればかり見て現実から背を向けるのは良くなく、つまり理想だけで計画をたてるのではなく、現実もちゃんと見て、計画的にやろうって事です。

この研修で感じた事。私はこの研修で特に感じた事は、原爆だけでなく戦争全体の恐ろしさを感じました。今の私たち、僕たち、私が出来事。まず私たちが平和のために出来る事は伝承をつなぐこと、考える事、向き合う事だと思っています。まずつなぐ事、これは戦争の恐ろしさを風化させては絶対いけないからです。考える事は今一度考えてみたら色々とか何かを感じられるからです。具体的には、また動く事はありませんが、向き合うのはかなり考えると類似しているので割愛します。とまあ私の考えは以上です。この研修で色々な事を学びました。

ヒロシマへ行って

白根北中学校 高山 羽奏

私は広島研修に行き原爆が落とされたことに対して甘い考えを抱いてしまっていたことに気づきました。そしてたくさんのことを学びました。その中で、印象に残っていることは3つです。

1つ目は被爆体験講話を聞いたことです。3歳のときに被爆した方のお話を聞きました。爆心地の近くにいた数万の人々は皆、遺体が粉灰となったそうです。そして粉灰となってしまった遺体は爆風に飛ばされ霧散。遺体の家族は亡くなった姿を確認することも許されなかったのかと思うと、胸が締めつけられました。爆心地から少し離れた場所では、服は燃え、皮膚は剥がれ、水を求めて川の中でたくさんの人が亡くなったといひます。また、爆心地からだいぶ離れた場所でも放射線の影響で病気になる、多くの方が亡くなったと聞きました。私は生き残った人たちの心が一番つらかったらうなと思いました。

2つ目は平和記念式典で述べられた平和への誓いです。「願うだけでは、平和はおとずれません。」その言葉に痛感しました。ああ、私はただ平和がおとずれることを願っていただけ。行動を起こそうとしていなかったのだな、と。また、力強い声で堂々と話す姿に心奪われました。

3つ目は平和記念資料館の見学です。資料館の中には、被爆した人が実際に着ていた服や、写真、絵などがたくさん展示されていました。実際に着ていた服は放射線がたくさん展示されていました。実際に着ていた服は放射線がたくさん入った黒い雨の跡がまだ残っていて、至る所がちぎれ、ボロボロになっていました。最初にその服を見て、その後に展示されている人の写真を見るのが怖くなりました。被爆による病気で苦しんでいる人の写真。とても痛々しい火傷。やせ細った子供。どの写真も目を背けたくなりました。そして、携帯で写真を撮る手も止まりました。先程書いたように、目を背けたくなるほどにつらい展示でしたが原爆の恐ろしさ、命の尊さをより強く感じられたよい体験だったと思います。

広島でのさまざまな体験を通して、今私たちにできることは、自分が正義で相手が悪だと決めつけずにお互いの話をよく聞くこと、そうやってほしいという願いを実現するべく行動を起こすことだと思いました。誰にでもできる平和への一歩を踏み出していきたいと思います。

広島派遣研修で経験したこと

中野小屋中学校 田中 伶美

私が広島派遣研修で経験したこと、特に心に残っていることは4つあります。

1つ目は平和記念公園見学です。平和記念公園に植えられている3本のアオギリの木のうち2本は移植された木でもう1本は新しく生えた木で、幹の色が全く違いました。私はその木の必死に生きようとしている姿を見て非常に感動しました。2本の木の被爆された面は茶色くなっていて裏側にはまだ青色が残っているところもありました。それと同じことが人間にも起こっていて正面から原爆を受けた人は体の正面に火傷をおうことを知りました。レストハウスには平日に訪れる人の9割は外国人であることを知り、たくさんの外国の人に原爆に興味を持って貰っていることに驚きました。日本人も原爆について深く知り、考えていく必要があると改めて思いました。

2つ目は被爆体験講話です。講話をしてくださったのは飯田さんという方で、3歳で被爆し、たくさんの人に本当の原爆の恐ろしさについて伝えていきます。原爆が落とされた後、爆心地の方では遺体も残っておらず、ほとんどが粉灰となっていることを初めて知りました。なので遺族の人は生存しているかも分からず非常に悲しんで大変な思いをしていたと思いました。飯田さんは原爆を落とされた時、「ピカッ」という閃光の後、爆風で彼は畳と一緒に吹き上げられたとおっしゃっていました。そのとき彼は3歳の子供だったのでとても怖く怯えていたと私は思いました。突風は四百メートル毎秒と音よりも速く、爆心地での地表温度は3000度を超えていたことを知り、そんな状態にあつたら私なら生きる気力も無くなってしまったと思いました。外で被爆された方も室内で被爆された方も痛く辛い思いをしていたと思いました。現在の核兵器は広島を落とされた原爆の数百倍の被害をもたらすと言われていています。なので現在、核兵器廃絶の署名活動などの取り組みがされています。核兵器廃絶をしなければ世界に平和は訪れません。そして人類の生存、世界恒久平和には核兵器廃絶が必須です。私はその事を多くの人に知ってもらい、一人一人が考える必要があると思いました。

3つ目は原爆証言者のつどいです。話をしてくださったのは早志さんという方で9歳という物心もついている頃に被爆され、そのことを生かし自分の体験したことをたくさん話してくださいました。早志さんにとって両親がいたことは大きな心の支えになったそうです。集団疎開をした多くの子供たちは両親が居ない孤児が多いことを知りました。また、早志さんは被爆後も笑ったり歌ったり踊ったりと楽しもうとする心を持ち続け、楽しいこともあったと教えてくださいました。

4つ目は平和記念資料館見学です。資料館にはたくさんの写真や絵、被爆された物などがありました。写真の中には被爆された方の写真もあり、私にはとても直視できるほど穏やかなものではありませんでした。そこで改めて現実を知り、また、原爆の恐ろしさを知ることが出来ました。

私はこの研修で実際に見た事、感じたことを忘れず自分なりに表現し、伝承していきたいと思えます。今後、世界から核兵器が無くなることを願っています。

原爆の恐ろしさ

内野中学校 土田 海都

僕は中学校活最後の夏休みに、広島平和記念式典等派遣事業に参加しました。そこでは、たくさんの事を学びました。その中でも特に印象に残っている事は3つあります。

1つ目は、被爆者の体験談です。3歳の時に被爆された方、母のお腹にいる時に被爆された方の話を聞き、一瞬にして大切な人を亡くした核兵器を世界から無くさなければならぬと仰っていて、二度と戦争を起こさず、私達と同じ目に遭わせたくないという気持ちが、話を聞いていて間近でひしひしと感じました。そして、3歳、お腹の中にいる時など、被爆者当時は幼かった方達も、年を重ね、今は高齢者となりました。年々、僕達のように戦争を知らない世代が増えていく中で、僕は戦争の悲惨さを後世に伝えていきたいと思いました。

2つ目は、平和記念公園に行ったことです。僕が心に残っているものは「平和の灯」です。核兵器が世界からなくなったら消化されるその火は、東京オリンピックがあった1964年から60年経った今も、ともされ続けています。その火が消えることを僕は願っています。次に「原爆の子の像」です。佐々木禎子さんは被爆者の一人で、小学6年生に白血病だとわかり、今まで元気だった禎子さんは、落ち込みました。そして闘病中にたくさんの鶴を禎子さんは折りましたが病気は治らず亡くなってしまいました。その後禎子さんの親友達が寄付をつのり、そのお金で「原爆で亡くなった全ての子供のために慰霊碑を作ろう」と呼びかけ、1958年に原爆の子の像が建てられました。禎子さんは療養中辛かったにも関わらず願いが叶うと信じて、鶴を折り続けたこともすごいなと思ったけれど、原爆の子の像としても形に残した親友達も素敵だなと感じました。

3つ目は、広島平和記念式典に参列したことです。僕はテレビや新聞などで見たことはありますが、実際に参列して参加することは初めてでした。式典には、岸田内閣総理大臣や広島市長などの方々が式典に参加し、平和宣言やあいさつを行っていました。その中で僕は広島市長のあいさつがとても心に響きました。なぜかという、今現在も続いているイスラエル、パレスチナの情勢の悪化について述べていたからです。広島市長の言葉がイスラエルとパレスチナの指導者に届いてほしいと思いました。核兵器の使用や戦争は、絶対にしてはいけないと広島市長の話を聞いて改めて感じました。この式典で述べていたことが世界中の人たちに届いてほしいです。僕達が平和のためにできることは、僕達自身が忘れずに二度と原爆が人を苦しめないように周りの人たちに伝えて、原爆の恐ろしさ、残酷さを周知させることが、僕達が今出来る、平和を守るための行動だと考えます。

戦争を忘れないように

黒崎中学校 椿 まい音

私は先日行われた広島平和記念式典派遣事業に参加しました。平和記念式典に参列したり、平和について話し合ったり、実際に被爆された方のお話を伺ったりと沢山の体験をさせていただきました。その中でも最も印象に残った体験は人々の感情や考えが様々な形で表されていた平和記念公園を見学したことです。平和記念公園には沢山のモニュメントがあり、意味や制作者などをボランティアの方に説明していただきました。その中でも特に心に残っているものが2つあります。1つ目は原爆の子の像です。みなさんは佐々木禎子さんを知っていますか。佐々木禎子さんは2歳の時に被爆し、白血病と診断され、12歳という若さでこの世を去りました。原爆の子の像は原爆で亡くなった多くの子どもたちの霊を慰め、世界に平和を呼びかけるために中学生が中心となり建立されました。原爆の子の像は9mもあり、像の周りには世界各地から送られてきた折り鶴が沢山ありました。私はそれらを実際に見て、とても感動しました。その折り鶴は再生紙の一部として広島の小学校や中学校の卒業証書に使われているようです。このような、思いを新たな形として残していく活動は素晴らしいと思いました。原爆の子の像を見て、禎子さんの療養中の心情や家族の思いなどを考えると胸が締め付けられました。そして、鐘の下にある石碑に刻まれている「これはぼくらの叫びですこれは私たちの祈りです世界に平和をきづくための」という文面を見て戦争を二度と起こしてはいけないこと、そして、核兵器を二度と使ってはいけないことを改めて思い知らされました。2つ目は平和の灯です。平和の灯は世界から核兵器がなくなったら灯火が消えると説明していただきました。現在、核兵器の数は減っていますが、すぐに使える核兵器の数は増えていることを知り恐怖を覚えました。この現状を知り、今以上に戦争や平和のことを世界に発信していかなければならないと考えました。私は、平和とはこの世界の全ての人が「幸せ」を感じることができると考えています。世界を少しでも平和に近づけていくために私はまず、今回広島に行った体験やそこで学んだことを周りの人に伝えることから始めたいと考えています。戦争や原爆のことを知り、平和について考え、自分ができていることを考えて行動に移すことができる人が増えれば平和に近づくことができると感じています。また、世界が戦争や原爆のことを忘れないことにもつながると思います。そして、私は戦争や原爆で苦しんだ人、今もなお苦しんでいる人がいることを絶対に忘れずに生きていきます。関心を持ち、知り、語り継ぎ、忘れない。このようなことを軸に行動し、いつか世界に平和が訪れることを願っています。

「広島で感じたこと」

濁川中学校 長井 莉愛

私は8月5日から7日まで広島に行き、平和について多くのことを学びました。平和記念公園見学では慰霊碑や様々なモニュメントを見て回りました。特に印象に残っているのは原爆の子の像です。そこではガイドさんが、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんや折り鶴について話してくださいました。佐々木禎子さんは、2歳のときに被爆しましたが外傷もなく、その後元気に成長しました。しかし、9年後の小学校6年生の秋（1954年）に突然、病気のきざしが現れ、翌年2月に白血病と診断されました。禎子さんは回復を願って鶴を折り続けましたが、1955年10月25日に亡くなりました。その後、禎子さんの死をきっかけに、原爆で亡くなった子どもたちの霊を慰め、平和を築くための像をつくろうという運動が始まり、全国からの募金で平和記念公園内に原爆の子の像が完成しました。その後この話は世界に広がり、現在も原爆の子の像には国内だけでなく世界中から折り鶴が届けられ、その数は年間約1000万羽、重さにして約10トンにもなります。

私はこの話を聞き、世界中の人々の平和の思いが折り鶴に託され、原爆の子の像に届けられているのだろうと感じました。また、平和記念公園を見学し、原爆ドームや慰霊碑を見て、原爆の悲惨さや平和の尊さ、命の大切さを忘れてはいけなかったと思いました。

平和記念式典には内閣総理大臣をはじめ、海外の来賓の方々や被爆者、ご遺族など多くの方が参列していました。初めに、原爆死没者名簿奉納があり、その後、式辞や献花が行われました。そして、広島に原爆が投下された午前8時15分、多くの方が黙とうを捧げました。黙とうを捧げている時、会場はとても静まり、そこにいた全ての方が被爆者の方々を追悼し、平和を願っているように感じました。私は、平和記念式典で、こども代表の平和への誓いがとても印象的でした。「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」私はこの言葉を聞き、胸を打たれ、平和を願うだけでなく、平和のために考えや想いを言葉や行動にしなくてはならないと強く思いました。

私が平和のために今できることは、今回の研修で知ったこと、感じたことをまわりの人に伝えていくこと、79年前に原爆が投下され多くの方が犠牲になったことを決して忘れないことです。最後に、広島でおきたことや平和の大切さを一人でも多くの方が知り、伝え続けられれば、世界は平和に近づくのではないかと思います。

1945年8月6日、広島に原爆が落とされ、1945年末までに原爆の影響で14万人もの人が亡くなったこと。私は、広島に行って、この事実だけでは分からなかった原爆の恐ろしさを学びました。

原爆を「地獄だ」と表現することがありますが、私がお話をお聞きした証言者の飯田さんは、原爆は、「悪人だとしても、善人だとしても、無差別にその人の大切なものを奪うもので、悪人を苦しめる地獄なんかではない」と話されていました。飯田さんは、幼い頃に被曝し、両親を亡くした原爆孤児でした。原爆投下から79年経った今でも、原爆投下直後の状況を生々しく覚えていらっしゃるのが、とても印象的でした。さらに、体だけではなく心にも影響があり、数年間、原爆の恐ろしい状況が夢に出てきてしまった、と話されていました。原爆投下の直後だけではなく、その後も苦しみ続けた人がいることを知りました。

また、皆さんは胎内被曝という言葉を知っていますか。胎内被曝は、直接被曝したのではなく、お母さんのお腹の中にいるときに被曝することをさします。私がお話をお聞きした胎内被曝された寺田さんは、お母さんが原爆の影響で盲目になってしまいました。目の見えないお母さんを支えるのは決して簡単なことではなかったはずなのに、目の見えないお母さんを引け目に感じた事はない、また、自分の結婚式での晴れ姿を見せてあげたかった、と今でも後悔している、と話されていました。

原爆の被害の大きさを表す事実として、14万人が亡くなったということの他にも、その後生涯苦労した方はもっと、ずっとたくさんいて、原爆には、数字だけでは到底表せないような悲惨さがあることを学びました。

そして、資料館で見たものも、とても印象に残っています。火傷の傷跡だったり、亡くなった方の骨だったり、直視できないほど悲惨な写真が何枚もあり、その写真を見ただけの私でさえ衝撃を受けました。それなのに、その状況を実際に目の当たりにして、自分も被曝して傷を負った方の絶望感は、想像を絶するようなものだったと思います。

「願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」これは、広島平和記念式典での、小学6年生の平和の誓いの一節です。私が広島で感じてきた、数字では表せない原爆の恐ろしさも、私の中で留めていては、何も変わらないと思います。世界から核兵器が消えない事は、少しの努力で変えられるような問題ではなく、長い時間をかけて考え続ける必要があると思います。私は、広島で得たことを、友人や家族に広め、自分の身近なところから、平和をつくっていきたいと思います。

あなたにとっての「平和」はなんですか？

両川中学校 畑野 湊雅

広島平和記念式典等派遣事業に参加しました。参加希望した理由は、被爆者が減ってきている現代の中で、自分は日本人として原爆について知らなくて良いのか、と思ったからです。原爆の恐ろしさ、被爆者の思いを知り、「平和」とは何かを考えました。

広島の平和記念公園では、ガイドの方が説明してくれました。慰霊碑には126冊の登録簿が埋められていて、34万人を超える人々が登録されていると聞きました。自分が想像していた数倍もの人々が被害に遭っていて、原爆でどれだけの人達が苦しんだのかを知り、胸が痛みました。他にも多くのモニュメントがありましたが、僕が一番印象に残ったのは「平和の灯」です。手首を合わせて被爆者を慰め、核兵器、戦争のない世界への祈りが込められています。灯されている火は、世界に戦争と核兵器がなくなった時に消すそうです。説明してくれた柏谷さんは「核兵器は減っていくのではなく、増えていて悲しい」と言っていました。僕はこの灯火が一刻でも早く消えてほしいと思いました。

平和記念資料館では、家が倒壊して下敷きになり、皮膚が剥がれている人の絵がありました。あたりが燃え、広島最大の商業地域だった場所は、まるで地獄のようでした。当時の悲惨な情景を思い浮かべれば、僕だけでなく、誰もが悲しみや切ない気持ちで胸がいっぱいになると思います。他にも、原爆がどのように投下され、何が起きたのか、証言者の話を元に作られた映像がありました。原爆がどのようなものか、映像で見るとより一層恐ろしさを感じました。

原爆の話をしてくださった寺田さんは、母親のお腹の中で被爆した胎内被爆者という方でした。お母さんは被爆した時、爆風で飛んできたガラスが両目に刺さり、視力を失ったそうです。寺田さんが結婚した時、お母さんは花嫁姿を目で見ることができませんでしたが、「綺麗だよ」と言ってくれ、寺田さんは感動したそうです。お母さんの視力と親子の幸せを奪った原爆が憎いです。罪のない人達に辛く酷い思いをさせる原爆、この恐ろしい核兵器を世界から廃絶するべきだ、と強く思いました。

自分にとっての平和は「幸せ」だと思います。美味しいものを食べたり、楽しいことをしたり、幸せを感じていると不満や争う気持ちが頭に浮かびません。また、自分が幸せを感じていると、周りの人に優しくなれると思います。人を傷つけたり悲しませても、自分が幸せになれることはありません。

「平和」という考え方は人それぞれ違うと思います。実際、平和とは何かを考えたワークショップでも、同じ班の人たちの意見はどれも違うものでした。

だから僕は、今後色々な人にこの研修で学んだこと、思ったことを聞いてもらい、「平和って何だと思う？」と聞いてみたいと思います。ひとりで平和はつくれません。世界でもみんなが「平和」を見つめ直し、話し合い、手を取り合って、戦争と核兵器のない未来になることを祈っています。

私は8月5日から7日にかけて広島に行きました。その3日間で、平和記念公園の見学をはじめ、平和記念式典への参列、とうろう流し、平和記念資料館の見学などを行い、平和について学んできました。それらの中で私の心に残ったものを2つ紹介します。1つ目は、原爆被害者証言のつどいでのことです。被爆者の土居さんが「人間が虫けらのようだった。人間らしく死ねなかった。」という言葉をおっしゃっていましたが私は最初、よく意味が分かりませんでした。人間の死に「らしく」という言葉がつくものなのだろうかと思ったからです。当時、土居さんは2歳で、煮干しを買いに行くために母親と数キロ離れた場所に電車で向かったそうです。その帰りで被爆し、乗っていた電車が脱線したため、土居さんたちは爆心地を避けて半円を描くようにして歩いて帰りました。その過程で、唸りながら倒れている人や、身体は無惨な姿になっているものの生きている女性がトラックに投げ込まれたり、脱線した電車の中で吊り革を握ったまま、座席に座ったまま真っ黒になり男女がわからない遺体などがたくさんあったそうです。それを聞いて私は人が人として扱われずに死んでいくことが人間らしく死ねなかったということなのだと思います。土居さんは17歳になって被爆当時の話を母親から聞かされましたが、当時何も出来なかったことに罪悪感があるそうです。さらに、土居さんの祖母は原爆による閃光を最初から最後まで不思議に思い見つめていたところ失明してしまったそうです。原爆は身体もボロボロになってしまいましたが、心まで壊してしまうものなのだと分かりました。2つ目は、被爆体験講話でのことです。ここでは原爆の実相やこれからどうしていくべきかについて学びました。原爆は最初、熱線、爆風、放射線によって街を滅ぼしますが熱線は爆発点では100℃以上になり、太陽の表面温度が約6000℃なのに対して爆心地では3000℃から4000℃にもなったそうです。爆風は爆心地で30トンの衝撃波と音より速い440mの突風をもたらしました。放射線は初期放射線と残留放射線に分かれ、初期放射線は7000msvで全員死亡しますが、爆心地から1000m離れたところでも6820msvもありました。熱線と爆風により、数万人の人々が真っ黒の炭になったり粉灰になって霧散し、灰になった人々からは遺骨も出ませんでした。また、放射線により脳神経細胞が破壊された人は2週間以内に全員死亡したそうです。そして、私が一番驚いたのは爆心地にあった島病院という病院の出来事です。その病院は空襲にも耐えうる病院として院長が誇っており、壁の厚さがなんと1m以上もあり全て鉄筋コンクリートで作られた頑丈なつくりとなっていました。原爆により木っ端微塵になりました。中にいた人は見当たらず、唯一婦長さんが真っ黒な炭となって石柱に寄りかかって死んでいました。そのような記憶が心にも体にも残っている人がいると思うと辛かったです。島病院のように爆心地近くはもちろん、そこから500m～1.2kmの人々は服が燃えたり皮膚が剥がれ水を求めて多くの人が川の中で亡くなり、1.2km以上離れていた人も白血病やがんなどで亡くなっていきます。皆さんも平和とは何か考えてみてください。今回の研修を元に、私は今を大切にしていきたいです。そのために今が意味のある時間になるようにすることが大切だと思います。今後、世界が笑顔で溢れ手を取り合い発展していくようになっていくことを願っています。

広島で学んだこと

新潟柳都中学校 丸山 杏

今回私は研修という形で初めて広島に行き沢山のことを学ぶことが出来ました。その中で特に印象に残っているのが平和の灯です。平和の灯とは平和祈念公園にある灯で、手首を合わせて手のひらを空に向かって広げた形を表現しています。平和の灯は点火されてから53年間燃え続けており、核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けようという、ねらいがあります。私は平和の灯を見て1日でも早くこの世界から核兵器を無くし、安心できる世界にしたいと思いました。

次に印象に残ったのは広島平和資料館です。平和資料館には多くの資料や遺品、被爆した方が身に付けていたものなどが展示されていました。一つ一つ良く見ると当時の情景が思い浮かび、とても悲しい気持ちになりました。戦争を経験していない世代が増えている今、次の世代に語り継がれるような場所があるのはとてもいいと思いました。

私は今回研修を通して核兵器を持つ国が多い中、日本は唯一の戦争被爆国として、[核兵器のない世界]の実現に向け今後も世界各国への呼びかけが必要だと思いました。これからの未来が核兵器に脅かされない幸せな世界になることを願っています。

私は、この広島での研修に応募するまでは、教科書でしか原爆について知る機会がなく、原爆によって多くの人が亡くなったということしか知りませんでした。この研修の参加に応募してからは、インターネットなどで原爆について調べましたが、とても現実にあった話だとは思えず、原爆はとても遠い話で、私には関係のないことなのだな。と感じました。ですが、実際に行って体験したりすると、原爆は決して遠い話ではなく、これからの未来のためにも考え、伝えていかなければいけないという考えへと変化しました。そのような考えとなったのは、私の中で特に印象に残った2つの体験によってだと思います。1つ目は、原爆の被爆者の方がお話をしてくださったことです。土居光子さんという2歳のときに被爆した方が私たちにお話をしてくださいました。土居さんから聞いた話の中で、特に印象深かったのは被爆者の方々の心の問題についてです。外出中、お母さんと一緒に被爆した土居さんは、被爆したあとに自宅まで歩いて帰っていったそうです。その途中で、周りの方からたくさん助けてもらい、無事に家に帰ることができたそうです。一方で、ひどい怪我を負った被爆者の方が、お母さんの着ていた着物の裾を引っ張り、「水をください。助けてください。」と言い、助けを求められることもあったそうです。「ごめんなさい。お水もない。」と断ると、その後にその方が亡くなってしまうということが何十回もあったと聞きました。その話を17歳になった土居さんが聞いたとき、お母さんは被爆者の方が助けを求める声を「念仏を唱えているように聞こえた。」とおっしゃったそうです。それは嘘で、本当はしっかり助けを求めているように聞こえたはずだと問い詰めた土居さんに、お母さんは、「念仏を唱えているとでも思わないとやっていけない。」と言ったそうです。その後お母さんは、亡くなるまでずっと、自分は助けてもらったのに人のことを助けられなかった。自分だけが生き延びてしまったと罪悪感を抱えているままだったそうです。私は、原爆が人に与える傷は体だけであり、既にそれは解決しているものだと思っていました。ですが、土居さんの話を聞いて、原爆は心にも傷を与え、その傷を一生抱えて、ずっと苦しいままでいた人がいたことを実感させられ、その苦しんだ人たちのことを思うと胸が締め付けられるようでした。2つ目は、平和記念資料館を見学したことです。平和記念資料館では、たくさんの原爆に関する資料が展示されていました。その中でも特に印象深かったのは被爆者の方の写真です。被爆者の方は大きな傷を負っていたり、ひどい火傷をしていたりと原爆の恐ろしさを語るような姿をしていました。あまりにも恐ろしい原爆の威力を目の当たりにし、とても衝撃を受けました。そして、ひどい傷を負ってしまった本人やその家族は、どのような思いでどれだけの辛さを感じたのかと思うと、もうこれ以上原爆による被害者を出してはいけないと感じました。

私はこの研修に行き、平和の尊さを感じました。この研修で学んだことや伝えてもらったことを無駄にしないよう、家族や友人などに伝えていきたいです。もう二度と核兵器によって苦しむ人が増えないよう、一刻も早く核兵器が世界からなくなることを願っています。

今から79年前の日本は戦時下にあった。厳しい生活の中ではあるが、日常の生活の中に小さな幸せや、ちょっとした喜びを見つけることもあったのではないだろうか。自分がいつ死ぬか分からない困難な状況であっても生き残ろうとする強い思いは人々を逞しくしていたに違いない。現代の人々とはそこが大きく異なる場所なのだろうと私は思った。「自殺した人は、地獄に行って閻魔様に叱られ、行くべきところに送られる。」被爆者の飯田國彦さんは話してくれた。今の日本は平和で、海外の貧しい国から比べると衣食住には基本的に困る事はない。また子供は、皆平等に教育を受けることが出来ている。終戦から、これほど恵まれた国となるまで復興を遂げたのだ。だが国が豊かになった一方で、現代は自ら命を絶つ人が年間約21万人もいるそうだ。79年前、一発の原子爆弾によりたくさんの命と、平等に訪れるはずの未来を広島から奪い去った。生きたいという自分の意志と生きるという使命を無慈悲にも、一瞬にして絶ってしまったのだ。原子爆弾の被害に遭い生き残った人の使命として、もう二度と原爆がこの世界で使用されないために原爆の恐ろしさや、平和の大切さを語り部されている飯田さんは、現代の日本で自殺を選択してしまう人に対し口惜しい思いでいる。なぜなら、「自殺する人は自分のもらった使命を果たしていない」からだ。

私はこの言葉に強く胸を打たれた。8月6日のあの瞬間以降、生きたくても生きることができなかった人々が大勢いた。飯田さんを含め生き残った人も差別や放射線の影響による病気に苦しむこととなる。またPTSD(心的外傷後ストレス障害)によって心を蝕まれた時期もあった。けれど飯田さんは「例えば苦しいことがあっても、決して生きることを諦めなかった。」とおっしゃっていた。私は、飯田さんが特別に生きる力や心が強いと初めは思っていた。だがその考えはすぐ変わった。生きていれば自分のやりたいこともでき、好きな事も見つけられ、いろいろなことができるのだ。そして、何より生き残った人の使命を飯田さんは見出したのだと私は考えた。現在、飯田さんのような被爆者の語り部の方は高齢となり年々減少している。対策も進められているが、遅々として進まずにいる。もっとより多くの人々の声が、力が必要であるとこの広島派遣研修を通して強く感じた。

79年前の広島や長崎で起きた出来事を私の身近な人から伝えたいと思う。もし心が折れそうな人が居るのなら、使命がきっとある。だから生きる事を諦めないでと伝えたい。私は私の出来ることを。戦争で苦しむ人が居なくなるよう。ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ。

広島から考える当たり前

東新潟中学校 村上 友葉

1945年8月6日広島に1発の原子爆弾が投下され、今年で79年が経ちました。今、広島空を見上げると綺麗な青空が広がっています。私はその事がなんだか感慨深くなって広島で毎日沢山の空の写真を撮りました。2泊3日の広島派遣を経て私が印象に残った事は、様々な国籍の人、年代の人が広島を訪れていたということです。ご年配の方から私たちと同じ学生、小さな子供たち、国外からなど沢山の方に会いました。日本国内には沢山の観光地がある中で広島を選んで、平和と向き合おうとする外国の方にとても感動しました。出会った方はみんなとても優しくかったです。特に平和記念資料館を見学した際に音声案内を聞いて熱心に見学する外国の方の姿に、改めて原子爆弾、平和について、沢山の人が注目していて、世界が一丸となって協力しなければならない事なのだと強く感じました。また、館内は実際の写真や遺品などがあり、中学生の私でも、見学する中で怖いと感じていたのに資料館には幼い子供も沢山いました。涙を流しながらもじっと展示を見ている子に凄いな、立派だな、平和を考えるのに年齢なんて関係ないのだと感じました。この広島派遣の中で特に印象に残った言葉があります。それは原爆被害者証言の集いでご自身も9歳の時に被爆をされたという、早志百合子さんが仰った「被爆した人は死んでも死ななくても不幸」という言葉です。現在88歳の綺麗でおしゃれな百合子さんから発せられる言葉は全てが壮絶で、経験したことがない私には到底理解出来るものではありませんでした。爆風、熱線、放射線によって被爆した年中に亡くなった14万人の方の苦しみは勿論、周りの人が亡くなる辛さ、焼け野原、死体で溢れた故郷、終戦後の差別、トラウマ、何十年と逃れる事の出来ない体調のこと。百合子さんはトラウマの影響で被爆から79年たった今でも、資料館などに入ったことは一度もなく、式典に参加したこともないそうです。私は聞いてるだけでも辛く、胸が締め付けられるような気持ちになりました。百合子さんはとっても辛いはずなのに詳細に、絵や地図を見せながら丁寧に話してくださいました。私は話を聞いて改めて、原爆の恐ろしさを理解し絶対に繰り返してはならないものだと強く思いました。私は家族がいる、衣食住がある、学校に通って、友達と遊べるという当たり前は当たり前ではないと理解し、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを沢山の人の人に知ってもらいたいと思いました。そのために、自分の行動で世界が変わる、平和についての理解を広めることができると信じ、まずは家族、友達、学校の人など1人でも多くの人に今回の貴重な体験の中で学んだことを伝えようと思います。どんなに些細なことでも沢山の人の願いが積み重なればいつかきっと達成できます。今後、全ての人がお互いを大切に尊重し合い、どこにいても綺麗な青空が見える、そんな世界になっていくことをこころから願います。平和の灯火が消える日が一刻も早く来ますように。

私は8月5日から8月7日の3日間広島に行きたくさんのことを学んできました。そこで主に私が印象に残ったことを2つ紹介したいと思います。

1つ目は被爆体験講話を聞いたことです。そこでは、原爆によって家族を失い原爆孤児となった飯田さんのお話を聞かせていただきました。私は今まで原爆という存在は知っていたけれどもどのようなものなのか、またどういう被害をもたらしてしまうのかははっきりわかってなく遠いものだと思っていました。けれども実体験を聞かせていただき、前よりもずっと身近に感じることができました。爆心地から半径500m以内ではあらゆるものが全焼破壊され数万人の人々が粉灰となって霧散し、少し離れたところでは多くの人々が服、そして皮膚が剥がれ、水を求めて手を伸ばしながら「水をください。」と、口々に言っていたそうです。毎年行われている平和記念式典の前には、その時に水を与えることのできなかった方々に対してのために献水を行っています。見ていてすごく切ない気持ちになりました。地下にいて生き延びることのできた人でも、最後外に出た際黒い雨に打たれてしまい白血病を患い、命を落としてしまう人もいたそうです。どれも今の生活からは全く想像のつかないものだったため、原爆というものの恐ろしさを深く感じました。

2つ目は平和記念資料館見学です。そこでは、被爆した方々が負傷した時の実際の写真や遺品、破壊された街並み、そして原爆によって壊された日常などが展示されていました。火傷によってただれてしまった皮膚、体が変形してしまっている人など、被災された方の写真は直視することが難しいほどにリアルなものばかりでした。原爆は人の体を一瞬でこれほどにも傷つけてしまうものなのだ学び、驚愕を受けました。被爆して生き残ることのできた方々によって亡くなってしまった友達について書かれた物も展示されていました。それを見ると、原爆によって被害に遭われた人も8月5日までは、今の私たちと同じように普通の学生として友達と笑い合ったり、遊んだりする楽しい日々を過ごしていたことがわかりました。それと同時に、私たちが普段過ごしている何気ない日常は幸せな物なのだなと感じました。生きたくても生きることのできなかった方がいることを考え、1日1日を大切にしたいです。

原爆投下から79年、日が経つにつれてどんどん原爆についてよくわかってない人や、そもそも知らない人が増えています。なので、原爆の恐ろしさをたくさんの人に伝えてこれからの平和に繋げていきたいなと思いました。

新潟市非核平和都市宣言

わたしたちのまち新潟市は、
日本海に面した湊町、また、実り豊かな田園地帯として発展してきました。
いま、市町村合併によって、新・新潟市に生まれ変わり、
水と緑に恵まれた魅力ある国際都市として、
本州初の「日本海政令市」を目指しています。

先の大戦で、わたしたちは、尊い生命や貴重な財産を失いました。
新潟市は、広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を恐れ市民が一斉避難した日もありました。
あれから60年。
わたしたちは、現在のわたしたちの暮らしが、戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを
忘れてはなりません。そのことを後世に伝えていかなければなりません。

核兵器の廃絶と世界の恒久平和が、わたしたちの永遠の願いです。
しかし、いまだに世界各地で紛争が絶えません。
飢餓、貧困、差別、人権侵害、環境破壊……、平和な暮らしを脅かすものが、世界に満ちています。
わたしたちの暮らす北東アジアでも緊張関係が続き、核兵器の脅威が強まっています。
わたしたちは、核兵器の不拡散、そして廃絶を強く訴えます。

わたしたちの安心で安全な暮らしを脅かす全てのものを無くすこと。
地球上の全ての人びとが、平和で豊かな暮らしを送ること。
地球全体が、共生互恵関係を築き、ともに繁栄発展すること。
それが、わたしたちの願いです。世界の人びとの願いです。
わたしたちは、そのために不断の努力を重ねていきます。

海のむこうは、友となる国々に。
わたしたちは、世界の平和のかけ橋となります。
子どもたちの未来のために、
わたしたちの暮らす北東アジアの人びとが、世界の人びとが手を取りあって、
日本海を「平和の海」に!

新しい新潟市誕生の記念すべき年に、
核兵器の不拡散、そして廃絶を願い、
環日本海の友好・交流の拠点都市として、
北東アジアをはじめ広く世界に向けて、
新潟市が非核平和都市であることをここに宣言します。

2005年10月10日

新潟市

令和6年度
広島平和記念式典等派遣事業
令和6年8月
発行 新潟市総務部総務課